言語学研究会の論文集・その3

言語学研究会の論文集・その3

ことばの科学

江苏工业学院图书馆
藏书章
3

むぎ書房刊　1989年

ことばの科学　3

定価　4，600円
（本体　4，466円）

1989年11月20日　印刷
1989年11月25日　発行

編　者　言語学研究会
発行者　布村　哲夫
印刷者　中田　隆
発行所　むぎ書房
東京都文京区小石川4―12-12
電　話　03-818-5952
振　替　東京　5-27913
印　刷　船舶印刷株式会社
製　本　㈱井上製本所
　　㈲加藤紙器製本所
8201

『ことばの科学』第3集の発行にあたって

この第3集は奥田靖雄の古稀にささげられている。言語学研究会を今日までそだててきた奥田靖雄の苦労にたいする，ぼくたち仲間のものの感謝の気持ちの表現でもある。ひとくちに40年といっても，人の人生の大部分をしめているとすれば，奥田は研究会のためにいきてきたと断定しても，さしつかえないだろう。アカデミズムのそとで研究会を組織することの意義を，奥田がじゅうぶんに理解していなければ，40年のあいだ苦節をまもりとおすようなことは，とうていありえなかっただろう。

日本の考古学や民族誌などがそうであるように，日本の言語学もアカデミズムのそとでそだってきているという，歴史的な事実から奥田は出発するのである。しかし，言語学研究会が日本の言語学をしょってあるくというような，だいそれた考え方をわれわれがもっているということではない。体制のなかに安住する大学の言語学と大学のそとでの，われわれの言語学とのたたかいのなかでしか，日本の言語学はそだっていかない，という発展の論理から奥田の組織論は出発するのである。ひとたび体制のなかに安住すれば，言語学への欲求は言語学者からきえていく。もし大学の言語学が自分の力でうごきはじめるとすれば，言語学研究会の言語学のような，在野の研究が大学の言語学の存在をおびやかすときのことであるだろう。われわれの言語学が大学の言語学に危機感を感じさせて，教授たちを研究にかりたてるとすれば，言語学研究会の存在はじゅうぶんに意味をもっている，ということになる。

大学のなかにも，研究会の仕事に共感をもっている研究者がたくさんいることを，ぼくたちはしっている。しかし，大学の教授たちのおお方は研究会の仕事をおもてだってみとめたくはないだろう。だが，彼らが専門家としてのほこり，学者としての良心をもっているなら，ぼくたちのかいたものよりも，数段すぐれた論文をかかなければならない。日本の言語学はそうすることでしか，停滞をうちやぶることはできないのだろう。

奥田が言語学研究会の存在の意味をこんなふうに理解していれば，アカデミズムか

らはみだした言語学者の研究を保障することが，研究会のもっとも重要な任務になる。そこらへんの三流の大学の卒業生であっても，志向さえあれば，言語の研究にたずさわることができるという保証を，こんな人たちにあたえることが，言語学研究会の，重要な任務になる。したがって，研究会はひとりひとりのメンバーに研究の手段と方法をあたえていかなければならないのだが，奥田はこの仕事をもっとも忠実に実行した人間である。名のない大学の出身者であっても，教師生活をつづけながら，じゅうぶんにりっぱな論文がかけるまでにそだっているのは，奥田の指導がすぐれているからであるだろう。40年もたてば，研究会のなかで世代交替がおこってくるのは必然である。民科時代からの先輩たちはもうみんな60歳にとどいていて，いささか老化の現象が進行している。奥田はこのことをじゅうぶん計算しながら，つぎの世代をそだてあげた。いま，ここで，ぼくは研究会のわかい世代を代表して，奥田にたいしてただ感謝の意を表現するのみである。

感謝のことばをおえて，つぎの，ぼくの仕事は，いささか荷がおもすぎるのであるが，この論文集に掲載されている論文のひとつひとつに案内的な解説をかくことである。読者諸兄を軽蔑するわけではないが，ここにのっている論文のほとんどは，おおくの読者には目あたらしいテーマにとりくんでいて，研究史のながれのなかに位置づけることが必要であると思われるのである。そして，それぞれの論文のテーマがさまざまな領域にちらばっているのであるが，べつの視点にたてば，ひとつの，共通のテーマにまとまっていくというところもあって，そこのところが研究会の今日のレベルをかたっているとすれば，その，いくつかの論文をひとつにまとめあげていくものをあきらかにして，そこでの，いちいちの論文の役わりをはっきりさせることが大切であるだろう。論文集の構成がそのようにできあがったのは，意図的ではないとしても，集団のなかでの研究であれば，偶然ではない。

この論文集の編集にあたって，『奥田靖雄の言語学』というテーマの論文を鈴木重幸にとくべつかいてもらった。いまのところ，奥田靖雄論をかける人としては，鈴木重幸がもっとも適当であると考えたからである。彼は民科の時代からの仲間であって，奥田の仕事を目のまえでみていた生き証人でもあるし，奥田の論文を講義などにもちいながら，いちばんよくよんでいる人でもあるだろう。なんといっても，鈴木は40年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まえの状況をなまなましく記憶していて，その状況のなかでの，奥田の初期の仕事を的確に評価できる人なのである。このことは，第2集にのっている，鈴木の論文『動詞の活用形・活用表をめぐって』がよくかたっているだろう。40年たって，いまの奥田からみれば，つまらない，幼稚な論文が，鈴木の目をとおせば，深刻な問題提起にみえてくる。奥田にとってみれば，すてさりたいものが，忘却のなかにさっていったものが，鈴木の頭のなかでは，なまなましくよみがえってくるのである。したがって，この奥田靖雄論は鈴木にぜひともかいておいてもらいたい論文だったのである。

鈴木の，この論文は奥田靖雄論としては最初のものであって，それだけに奥田の言語学を完全にとらえているとは，かならずしもいえないだろう。日本の言語学史をかく人がさきでうめていかなければならない，空白の部分がかなりのこっていることだろう。なかんずく，奥田の言語学をささえている方法論上の問題になれば，鈴木の論文は暗示的であって，ふかいりしてはいない。命題にまとめてしまえば，なんでもない，言語学上の，自明の論理が奥田の頭のなかでどのような道すじをとおって，くみたてられたのか，ということは，まだ秘密のままにのこされている。そこのところを解明することは，つぎの世代の研究者にとって，あるかなければならない道すじをさしだすことにもなるのだろう。鈴木の，この論文は奥田の言語学，なかんずく文法論を解説したものであって，彼の音韻論，文字論，語彙論などは正面からあつかってはいない。たとえば，明星学園の『にっぽんご7　漢字』のなかに掲載されている説明文のすべてが奥田の筆になることは，よくしられた事実であって，そういう仕事にたいする評価もこれからなされなければならないだろう。奥田の教育論，文学論についての紹介はべつの人の仕事である。とにかく，奥田靖雄論に先鞭をつけた鈴木重幸にはお礼をのべなければならない。

2番目の，工藤真由美の論文は，この論文集のかなめをなしている。この論文は，主要なテーマが，日本語におけるパーフェクトなのであるが，その説明にあたっては，テンスやアスペクトにかかわる諸現象が，まえもって，一般的なかたちで，用意されていなければならず，そのため包括的な性質をおびてくるのである。つづく，いくつかの論文は，なんらかの側面で，工藤の論文と交差している。

この論文のまえがきにあたるところで，工藤は，いまなぜパーフェクトととりくむのか，という問いにこたえながら，現在の日本の文法論における論争のまっただなか

に読者をつれていく。というのは，きわめて常識的な立場にたつ言語学者は，「する」と「した」との，ふたつのかたちを《過去》と《非過去》との，テンスの対立としてとらえているのだが，大学の国語学者たちは，おおかたがこのような見方に反対して，この対立をテンスではなく，完了と未完了との，アスペクトの対立としてとらえようとする。いくらか進歩的な，二，三の学者はそこにテンスの対立があることも，アスペクトの対立があることもみとめているが，このばあい，テンスとアスペクトとは共存できないものとみなす。つまり，具体的な使用のばあいでは，「する」も「した」もテンスかアスペクトかの，いずれかの意味が実現しているとみなして，テンス的な意味とアスペクト的な意味との融合としては考えない。「する」と「した」とがテンス的に対立しながら，他方では，それらが「している」「していた」とアスペクト的な対立をなしている，というような，ヨーロッパ風の常識的なとらえ方には，とうていくみすることができないのである。動詞の活用形のいちいちがテンス，アスペクト，ムードの複合としてあらわれてくるという事実は，彼らの理解の範囲をのりこえている。

ところで，大学のなかで普及している，この種の偏見は，なかんずく「した」が完了をあらわし，「する」が未完了をあらわすという，部分的な事実をよりどころにしている。しかし，ほんとうにそうであるか，ということになれば，偏見の支持者たちは事実にもどることをしない頑固さである。たとえば，「9月には家がたつ」と「3月には家がたった」というような文のなかでの「たつ」と「たった」とをくらべると，完了ということではひとしく，「これから」と「これまで」との，テンス的な対立をなしていることが一目瞭然である。たとえば，「ご飯をたべたよ」という文の「たべた」には完了の意味がふくまれているとしても，「つかれたよ」という文の「つかれた」にはこのような意味はふくまれてはいない。「着物はきた」という文の「きた」には完了の意味がふくまれているとしても，「着物がぬれた」という文の「ぬれた」には完了というよりは，むしろ未完了の意味がふくまれている。とすれば，「した」が完了をあらわし，「する」が未完了をあらわすというような，一般的な規定はなりたたなくなるだろう。もし，これらの「した」に共通な意味特徴をもとめるとすれば，それは，動作なり変化がはなし手のはなすモメントに先行して，生じていて，その結果なり効果が現在もまだ存在しつづいている，ということにほかならないだろう。しかし，ここでの「たった」「たべた」「きた」というような，動詞のかたちのなかには，部分的な意味特徴にしろ，完了の意味がそなわっていて，寺村秀夫のような日本

語教師がこのことを承認することから，ごくあたりまえの，きわめて常識的な，動詞の活用表がひっくりかえるとすれば，ことは重大である。工藤真由美はこの種の「した」を動詞の過去形にみられる《パーフェクト》の現象だとみなす。そして，工藤はこのことの正当性を証明するために，《パーフェクト》とはどのような，文法的な現象であるか，日本語ではこの《パーフェクト》が動詞のどのような文法的なかたちによって表現されているか，という問題にとりくんでいく。工藤真由美の問題提起の過程をぼくなりに解釈すれば，このようになる。

結論的にいえば，工藤は，完成相の「した」，継続相の「している」と「していた」がパーフェクトの表現手段としてはたらいている，という事実をみとめる。しかし，これらのアスペクトのかたちが表現しているパーフェクトの意味は，これらのかたちにとってみれば，けっして一次的なものではなく，そこから派生してきたものである。とすれば，これらのかたちが表現する一次的な意味と派生的なパーフェクトとのあいだにどのような関係があるか，確認しなければならなくなるだろう。こうして，Ⅱでは，工藤は，完成相の「する」と継続相の「している」との，アスペクト的な対立を，基本的な意味において，まえもって整理しておく必要にせまられる。

工藤は完成相の「する」のアスペクチュアルな意味のなかに《ひとまとまりの動作・変化》と《限界に到達した動作・変化》とをみている。他方では，継続相の「している」のアスペクチュアルな意味のなかに《動作の持続》と《変化の結果の持続》とをみている。具体的な使用を観察してみると，そうであることがしばしばなので，このことはみとめておこう。ところで，完成相における「ひとまとまり性」と「限界の達成」との，ふたつの意味のあいだの関係をどのようにとらえてみせるかということは，今日のアスペクト論における，重大な争点のひとつなのである。ボンダルコのような学者は，最近はひとまとまり性の優位を主張することはやめて，この，ふたつの完成相の意味を，動作をどの角度からとらえてみせるかということのちがいとして，結局はひとつであると，かたづけてしまう。しかし，完成相は，いちいちの使用のばあいにおいて，いずれかの意味を実現していて，どうとらえようと，おなじことである，ということにはならない。それぞれの意味を実現する条件を具体的にあきらかにする必要があるだろう。いま，工藤には，ここで，このことを解決する必要はない。完成相の「する」の意味としては，パーフェクトとの関係において，「ひとまとまり性」を前面におしだす。「している」という継続相において，動作動詞が《動作の継

続》をあらわしているのにたいして，変化動詞は《変化の結果の継続》をあらわしているということは，承認ずみの事実である。

さらに，工藤は，完成相と継続相との，アスペクト的な意味の対立を，テキストのなかにおける，これらのかたちの機能的な対立とむすびつける。つまり，テキストのなかでは，完成相が他の動作との，継起的な交替を表現する手段としてはたらくのにたいして，継続相は他の動作との，同時的な共存を表現する手段としてはたらく，と工藤は考えるのである。この工藤の考え方は，ヨーロッパのアスペクト論が到達している，ひとつの頂点をうつしだしているのだろうが，工藤がこの考え方を自分のものとして展開するにいたるまでには，動作の内的な時間と外的な時間との統一性を主張する，奥田の時間論が媒介しているだろう。ひとりで勉強しているのではないから，研究史が成立するのである，という論理がみえてきて，いっしょに勉強することの大切さをおしえてくれる。工藤はそのようなアスペクトの機能を「テキスト構成的機能」とよんで，とくべつにとりたてるわけだが，そのことはテキストのなかでの，パーフェクトの機能の特殊性を考慮してのことである。実際問題として，はなしあいのことばのなかでもアスペクトは使用されていて，アスペクトの機能をそこに限定するとせまくなるのだが。しかし，このことも，工藤にとってはさしあたっての問題にはならない。

すでにのべてあるように，日本語の動詞の継続相は，その基本的な意味において，動作動詞のばあいでは，動作の継続をあらわし，変化動詞のばあいでは，変化の結果の継続をあらわしているということなのであるが，具体的な使用においては，そういうことではとけないばあいにぶつかる。こういうところでは，《ある設定された時点において，それよりもまえに実現した動作の結果あるいは変化の結果が，後続する場面にかかわってきて，それになんらかの影響をあたえている》というような意味を実現している。ここでの継続相「している」のなかには，まずある出来事が先行していて，その出来事の結果が後続する場面になんらかのかたちで原因として作用している，というような意味あいがふくみこまれている。したがって，そこでは，話し手がはなす時点のほかに，先行する出来事の時点と後続する場面の時点とのふたつが共存していることになるだろう。そして，工藤によれば，このような意味をもっている動詞のかたちがアスペクト論における《パーフェクト》にほかならないのである。日本語の動詞はもっぱらパーフェクトを表現する形式はもっておらず，継続相の「している」

というかたちが過去，現在，未来のパーフェクトの表現手段として使用されている。Ⅲにおいて，工藤は日本語におけるパーフェクトの発見者として登場するだろう。工藤はヨーロッパのアスペクト論にまなびながら，日本語の動詞にパーフェクトをみいだすのである。工藤の論文の，積極的な意味はまさしくここにある。たしかに，日本語のアスペクトにかかわる，先行する，いくつかの論文では，パーフェクトの現象は《経験》とか《記録》とかいうような用語のもとに記述されている。しかし，工藤がこの《経験》とか《記録》とかという用語を《パーフェクト》におきかえたとき，その本質の理解において，180度の転回をおこなっている。日本におけるテンス・アスペクトの研究は，これから飛躍的な発展をみせるにちがいない。

ところで，パーフェクトが先行する出来事時点と後続する設定時点との，ふたつの時点をふくみこんでいるとすれば，《変化の結果の継続》をいいあらわす，変化動詞の継続相はパーフェクトではないか，という素朴な疑問にぶつかる。変化動詞の継続相においては，変化が先行していて，その結果としての状態が設定時点に存在しつづけている。そして，その結果的な状態が設定時点におけるあたらしい場面になんらかの影響をあたえているとすれば，やはりそれはパーフェクトではないか？　ア・ア・ホロドヴィチやイ・ヴェ・ゴロヴニンのような，ソビエトの日本語研究者は，変化動詞の継続相をパーフェクトであるとみている(注1)。じっさいに，ユ・エス・マスロフのような，アスペクト論の最高権威も，このような結果的な状態をいいあらわすアスペクトのかたちを《状態のパーフェクト》とよんで，パーフェクトのひとつのタイプとしてあつかっている。工藤のよぶところのパーフェクトは《動作のパーフェクト》に相当していて，パーフェクトはこのふたつのヴァリアントをもっていることになる。たぶん，日本語の継続相がそうであるように，英語の動詞のパーフェクトも《状態のパーフェクト》と《動作のパーフェクト》との，ふたつを表現しているのだろう。うけみの形動詞の過去のかたちで表現されている，ロシア語のパーフェクトも，たぶん二面的であるだろう。マスロフによれば，はなし手の注意の焦点が先行する動作のうえにおかれたとすれば，《動作のパーフェクト》が生じるし，後続する，結果的な状態に焦点をあてれば，《状態のパーフェクト》が生じる。

ところで，Typology of resultative constructions の第1部第1章の著者たちは《状態のパーフェクト》を resultative という用語でよんで，パーフェクトとしてはあつかってはいない(注2)。工藤は resultative という用語を採用してはいないが，

たぶんこの立場を採用しているのだろう。この論文では，工藤は変化動詞の継続相があらわす意味を《結果の持続》とよんでいる。こうしておいて，工藤は，Ⅲで，継続相のあらわすパーフェクトと結果持続とのちがいをしきりに強調する。Typology of resultative constructions の著者たちが resultative とパーフェクトとのちがいとしてとりあげていることが，工藤のいうところの，結果持続とパーフェクトとのちがいに相当している。工藤は，ここで，パーフェクトのばあいでは，先行する出来事の時点をあらわす時間の状況語が文のなかにあらわれてくるが，結果持続のばあいでは，おなじ時間の状況語が後続する結果的な状態の時点をあらわしている，という事実を指摘する。もしそうであるとすれば，英語のパーフェクトは，基本的にはむしろ resultative であるのかもしれない。このような事実は，はなし手の焦点がどこにおかれているかということのちがいをみごとに表現している。

継続相が表現する《結果持続》と《パーフェクト》との，意味のうえでのちがいは，テキストのなかで具体的な出来事を時間的な関係のなかに配列していくときにはたす，これらのアスペクチュアルなかたちの機能に照応している。すでにのべてあるように，テキストのなかでは，完成相のかたちは前進的な，継起的な交替を表現する手段として，継続相のかたちは出来事の同時的な共存を表現する手段としてはたらく。これにたいして，パーフェクトは先行する出来事をさしだすことによって，出来事の進行を一時的に中断して，後退させる。工藤はこのような事実を確認することによって，パーフェクトの存在をますます確実なものにしていく。

Ⅲの3で，工藤はパーフェクトが，完成相や継続相とくらべて，アスペクト的にどのようにちがってくるか，ふたたびとりあげる。ここで，彼女は，《結果持続》をパーフェクトとみなそうと，resultative とみなそうと，ふたつはアスペクト的におなじではない，ということをしきりに強調する。しかし，彼女は，他方では，結果持続とパーフェクトとの共通性をみとめながら，結果持続とパーフェクトとの連続性，結果持続からパーフェクトへの移行，中間的な段階の存在を指摘している。こうして，ふたつの，アスペクチュアルな意味のきりはなすことのできないことをみとめている。とすれば，これらをひろい意味でのパーフェクトにまとめることが可能であるかもしれない。このことは「した」のパーフェクト性を確認するとき，深刻な問題になってくるだろう。

さて，工藤は，「している」という継続相のかたちによって表現されるパーフェク

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

トの現象をさまざまな角度から検討したあと，完成相の過去のかたち「した」にも，単純過去とはべつに，現在パーフェクトの意味が存在することをみとめる。そして，もし，「した」が現在パーフェクトの表現としてはたらいているとすれば，そこでは動作なり変化ははなし手のはなす時点に先行していて，その結果が現在におよんでいる，ということになって，過去と現在とのふたつの時点をふくみこんでいる，ということになるだろう。したがって，「した」が完成相の過去であるという，一般的な規定にいささかも矛盾しはしないのである。このことはすでに30年前に鈴木重幸が指摘している。寺村秀夫が「した」を完了であるというとき，その「完了」は文字どおりの完了であって，パーフェクトではない。

ところで，「した」のパーフェクト性がもっともあざやかにあらわれてくるのは，主体になんらかの変化がおこることをさししめしている変化動詞においてである。たとえば，「かわく」「ぬれる」「はれる」「こおる」「とける」「にごる」「ねむる」「よう」のような動詞。この種の動詞が過去のかたちをとるとき，過去のある時点に生じた変化の結果としての状態が現在もまだつづいている，という意味が表現されているとしても，文字どおりの完了という意味はみいだせないだろう。すくなくとも表面には，あからさまにあらわれてはいない。他方では，居場所の交替をあらわす動詞が完成相の過去のかたちをとるときにも，パーフェクト性がつよくでてくるだろう。たとえば，「きた」「いった」「はいった」「でた」のような。ところで，この，ふたつのパーフェクトのタイプをくらべると，一方が状態に焦点があてられているのにたいして，他方が動作の方に焦点があてられている，ということになるだろう。とすれば，ここでも《状態のパーフェクト》と《動作のパーフェクト》がみられることになる。そして，工藤がするように，《動作のパーフェクト》のみをパーフェクトとして承認するとすれば，まえにあげたような《状態のパーフェクト》はここからはみだしてしまうだろう。

一般的にいって，《動作のパーフェクト》では，語彙的な意味に左右されて，パーフェクト性はそれほどあざやかにおもてにあらわれてこないだろう。とにかく，「した」のかたちがパーフェクト性をおびてくるのは，主としてはなしあいのなかである，というような指摘をのぞけば，「した」のパーフェクト性については，工藤はそれほどつっこんでいない。彼女のこれからの研究に期待することでもあるが，どのような動詞が，「した」という過去のかたちをとりながら，どのような場面に，どの程度にパ

ーフェクト性を発揮するか，あきらかにすることが必要であるだろう。たぶん，「した」のパーフェクト性は，「してあり」「したり」という，ふるいかたちにつきまとっていた，現在パーフェクトからのひきつぎであるだろう。とすれば，《動作のパーフェクト》においては，現在パーフェクトから過去テンスへの移行が進行したし，《状態のパーフェクト》においては，現在テンスへの移行が進行したのだろう。あとの方の現象は「つかれた」「こまった」「しびれた」「ひえた」「はらがへった」「のどがかわいた」というような，状態動詞の過去のかたちのなかにみられる。状態の出現が先行しているとすれば，この種の動詞の過去のかたちもパーフェクトを表現しているといえるだろうが，そのことには無関心であるとすれば，現在の状態を表現しているだけのことである。こうして，「した」のかたちが過去をあらわしたり，現在をあらわしたりしたとしても，なんら不思議はないのである。こんなことが考えられるとすれば，「した」のもっているパーフェクト性は，「した」のもっている文法的な意味の全体系のなかで，語彙的な意味との関係のなかで，歴史的な過程として確認しなければならないのだろう。「まがった道」「ふとった人」「とがった鉛筆」というようなくみあわせにおける「まがった」「ふとった」「とがった」の用法もふくめて。

工藤の論文はまだつづいていくのであるが，主要な部分の解説はおわっているので，ここでやめることにする。いささか批判めいたこともかいたが，この論文がこれからのアスペクト研究の出発点になるだろうと，かんがえてのことである。奥田の表現によれば，この論文によって，日本におけるアスペクト研究の，みじかい，つかのまの，奥田的な段階はおわりをつげて，工藤の時代にはいりこんだ。

3番目の，構文論グループ（女性）の論文は，接続詞の「とき」によってむすばれる《時間的なつきそい・あわせ文》の研究にささげられている。この種のつきそい・あわせ文は，ふたつの出来事のあいだの同時性の表現としてあらわれるのだが，このばあい，つきそい文の述語のかたちがテンス・アスペクトの，どのようなかたちを採用するかによって，つきそい文にさしだされる動作の，どの局面において，いいおわり文にさしだされる出来事と同時であるか，ということで，その同時性にさまざまなヴァリエーションがつくりだされていく。そして，この論文は，つきそい文の述語が「するとき」「したとき」「しているとき」「していたとき」の，4つのかたちにかぎって考察をすすめている。

もちろん，この論文は寺村秀夫のテンス・アスペクト論を批判するためにかいたものではないが，こうすることで，おのずから寺村秀夫の批判になっている。寺村は「する」と「した」のかたちのなかに，テンスからきりはなされた《未完了》と《完了》との対立をみるのであるが，このばあい，有力な根拠として，「するとき」と「したとき」とにおける「する」と「した」との対立をとりあげる。終止の位置にあらわれてくる「した」と「する」との対立と，接続詞の「とき」をともなう，つきそい文の述語の位置にあらわれてくる「した」と「する」との対立とは，機能においてまったくちがっていて，同列におくこと自身が暴挙なのであるが，それはべつとして，「したとき」の「した」に《完了》というアスペクチュアルな意味がそなわっているという，一般的な結論そのものは，この論文によれば，なりたたない。変化動詞がつきそい文の述語の位置にあらわれて，「した」のかたちを採用するとき，おおくのばい，《完了》の意味を実現するのであるが，状態動詞や動き動詞のばあいでは，そうはならない。「つかれたとき」とか「ぬれたとき」とかいうばあいの，過去形の「した」は，状態が存在しつづけていることをあらわしているだろう。「あるいたとき」とか「ゆれたとき」とかいうばあいの，過去形の「した」は，うごきがまだ進行していることをあらわしているだろう。寺村が「したとき」の「した」に《完了》の意味があるというとき，アスペクト的な意味と語彙的な意味との関連を無視しているのだが，それよりもまえに，具体的な事実にもどることをわすれている。

ところで，接続詞の「とき」でむすばれる，時間的なつきそい・あわせ文においては，「するとき」「したとき」の「する」「した」は，つきそい文にさしだされている動作の，どの局面においていいおわり文の出来事と同時であるか，ということをあらわしている。同時性というタクシス的な関係のなかにおける，ひとつの動作の局面の表現としてはたらいているのである。ここで，この論文は，ヤコブソンによって提出された，《タクシス》あるいは《タクシス的な関係》という，あたらしい時間の概念をみちびきいれる。この論文にしたがえば，タクシスというのは，限定された，みじかい時間帯のなかで生じてくる，いくつかの動作の先行と後続，あるいは同時の関係をさしていて，その関係の表現の形式として，テンスやアスペクトの，さまざまなかたちが利用されているとはいえ，それらとはことなる，時間的な概念である。ここで使用されているテンスやアスペクトのかたちはテンス的な意味をきりすてていて，アスペクト的な意味のみがいかされている。したがって，いいおわり文の述語の位置

にあらわれてくるテンス・アスペクトのかたちとは，その機能と意味とにおいて本質的にことなるのである。

この論文では，さらに，この種のつきそい・あわせ文は，同時性という，タクシス的な関係を表現しているばかりではなく，時間的な条件づけをも表現している，とする。つまり，つきそい文は，いいおわり文にさしだされる出来事に時間的なわくぐみをあたえるということで，つきそい文といいおわり文とのあいだには時間的な条件づけ・条件づけられの関係が生じているのである。ところが，この時間的な条件づけ・条件づけられの関係は，ふたつの出来事の，偶発的な出会いをのぞくとすれば，いいおわり文にさしだされる出来事が，つきそい文にさしだされる出来事によってつくりだされた，あたらしい場面に条件づけられている，というような，《場面的な条件づけられの関係》をともなっている。《場面的な条件づけられ》の関係をかんたんに説明するとすれば，こんなことだろう。たとえば，「窓をあければ，港がみえる」というとき，窓をあけなければ，港はみえないのである。つまり，窓をあけることによって，生じてきた，あたらしい状況が「みえる」という状態を保障するのである。おそらく，このような関係が《場面的な条件づけられ》ということになるのだろう。こうして，この論文は，完全なかたちで解決されているとはいえないが，《時間的な条件づけられ》，《場面的な条件づけられ》という，原因，条件，きっかけなどとはことなる，条件づけられ性のあたらしいタイプを提出しながら，あわせ文の研究の，あたらしい道すじをさぐっている。

この論文をかいた，構文論グループの女性たちは，小学校，中学校の教師であったり，日本語学校の教師であったりして，大学の先生からみれば，ずぶのしろうとである。つとめのあいまあいまにあつまって，カードをあつめ，分類し，分析して，結果を原稿にまとめていくわけだが，彼女たちのこの足どりのなかにあたらしい時代のまえぶれをよみとることができるだろう。

4番目の，村上三寿の論文は，最近の，いくつかの論文に刺激されて，いささかあわててかきあげた，といったような性格のものである。奥田靖雄は，日本語では《結果的な状態》が変化動詞の継続相によっても，動作動詞のうけみのかたちの継続相によっても表現されているという事実を，アスペクトについての論文のなかでたびたび指摘している。他方では，Typology of resultative constructions の著者たちは，

先行する動作を前提にして成立しているところの，対象の状態は resultative がさししめすが，動作の結果ではないところの，もともとの状態は stative がさししめすとして，resultative と stative とを区別している。さらに，この resultative は，主体の結果的な状態をあらわすものと，客体の結果的な状態をあらわすものとの，ふたつの種類にわけられる。とすれば，日本語において resultative としてはたらいている動詞のかたちは，主体的な resultative であれば，変化動詞の継続相のかたちであるし，客体的な resultative であれば，動作動詞のうけみの継続相のかたちである，ということになるだろう。こんなことがしきりに論議されているとき，動詞のうけみを専門的に研究している村上にとってみれば，客体的な resultative としてはたらいている他動詞のうけみのかたちをめぐって，だまってとおりすぎることができなかったのだろう。

村上の仕事は，結果からみれば，奥田靖雄が20年前に連語論でおこなった他動詞の分類を，他動詞のうけみのかたちにあてはめたにすぎないともいえる。だが，興味ぶかい指摘がないわけではない。たとえば，他動詞のうけみのかたちの継続相には先行する動作のイメージがきつくつきまとっているのにたいして，変化動詞の継続相では先行する変化のイメージがきわめてよわく，そのこととからんで，変化動詞から状態動詞への，あるいは質形容詞への移行が徐々に進行している，というような指摘がある。つまり，変化動詞の継続相においては，resultative から stative への移行が進行しているが，他動詞のうけみのかたちではそのような現象はおこっていないのである。ところが，英語やロシア語では，動詞のうけみのかたちにおいても，resultative から stative への移行が進行している。かたちのうえではうけみであるものが意味的にはうけみではない，という現象にしばしばぶつかるだろう。このような現象がなぜおこってくるのか，説明するためには，語彙と文法との，ふたつの領域にまたがる，体系的なアプローチがもとめられるだろう。日本語には自動詞であるところの変化動詞の，おおきなグループが存在しているという事実は，このこととからんで重大である。日本人はただの状態あるいは特性を表現するためにも，この変化動詞の継続相のかたちをしきりにもちいる。たとえば，「すんでいる」「にごっている」「かわいている」「ぬれている」「ふとっている」「やせている」のような。対照言語学の，あるいは typology の成立は言語学の必然的な発展であって，言語学者の主観的な期待からうまれてこない，ということがみえてくる。われわれは対照言語学が成立するま

で日本語の研究をふかめていかなければならないのだろう。学校文法から typology はうまれてこない。しかし，民族主義者にとってはそのことがありがたいのである。こんなふうに考えていくと，村上のこの論文もやはり現代なのだろう。

5番目の，荒正子の論文も，そういえば，そうである。現代の言語学は，なかんずくテンス・アスペクト論，述語論は，《動作》《変化》《状態》という意味的なカテゴリーをぬきにしては，さきにはすすめない，というような段階にきている。しかし，これらの意味的なカテゴリーの内容をみごとに規定した論文は，まだみあたらない。それがどこまで正当であるか，ぼくにはみえないのであるが，奥田靖雄による《状態》の規定は興味をひく。奥田の規定が，1982年の『Семантические типы предикатов』（述語の意味的なタイプ）のなかの，いくつかの論文でのべられていることからの展開であるとすれば，状態をめぐる規定のあり方の，ひとつの方向をしめしている。奥田の規定がとくべつ風変わりというわけではない。荒がこの規定をもちいて，形容詞の分類に成功しているとすれば，なおさらのことである。

ところで，状態のカテゴリーの表現形式はひとつの品詞にかぎられてはおらず，動詞，形容詞，名詞にまたがっている。荒はそのうちの形容詞にかぎって，この論文で状態のカテゴリーをあきらかにしようとする。荒は状態に関する奥田の規定にしたがいながら，従来の形容詞の分類とはことなって，状態形容詞のグループをとりだす。荒によれば，状態形容詞はもっぱら述語の位置にのみあらわれるという，構文論的な特性をもっている。状態が一時的な，偶発的な現象をとらえているとすれば，それをいいあらわす状態形容詞が連体修飾の位置にあらわれることのできないのも当然である。コンスタントな特性をさししめす質形容詞のみが，同一グループに属する，いちいちの物をとりたてるという機能をもたされて，連体修飾の位置にあらわれてくる。いってしまえば，このような平凡な事実が荒の論文でのべられているわけだが，このようなアプローチも言語学のあたらしい時代をものがたっているのだろう。

6番目の，構文論グループの論文『なかどめ——動詞の第一なかどめのばあい——』は，この論文集の第2集にのせてある，同名の論文のつづきである。前回の第2集のものが動詞の第二なかどめをあつかい，今回の第3集のものは第一なかどめをあつかっている。従来の研究では第二なかどめと第一なかどめとは文法的なシノニムと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com